
PricelesSchoolLife

邪那 磊亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P r i c e l e s S c h o o l i f e

【Nコード】

N 4 3 0 5 I

【作者名】

邪那 磊亜

【あらすじ】

ここはたくさんのお優秀な生徒が集まる魔法^{ソフィスタレス}大学院。そこで働くエヴァンレヒト教授に一目惚れしてしまった、新入生アリスはその独特の思考回路を用いた思考錯誤の末、教授をストーカーすることを決意しました。しかし、さすがは魔法の達人。中々上手くいきません。そんな時アリスはあるものと出遭いました。

エヴァンレヒト教授と新入生アリスとその仲間達とあるもののお話。
注：主人公は教授です。

「スクールライフはプライスレス」

「スクールライフはプライスレス」

私の名前は、アリシエーラ「フラメント」。愛称はアリスよ。ちなみに綴りで書くと『Alisiera Fragment』、ってそれはどうでもいいですね。

これからこのお話の世界観とか、設定なんかをばーんと紹介します。ちゃんと最後まで読まないと、後で読み返さないといけなくなるかもしれませんよ。色々ややこしいことが好きなのが、ライターやっていますから。

まずは、世界観設定から。この世界には魔法もあれば、魔物もいます。神話とかは、地域とかによって名前を使い分けていますが、基本クトゥルフ神話を採用しています。ココで分からない人は、一度調べておくといいですよ。

私はこの世界にある四つの大陸のひとつ「テトラヴィア」のノーデンス共和国首都ノーディアに住んでいます。そして、その魔法大学^{タレス}院に入学して3ヶ月の新入生です。

ここまでで、つまらないかと思った人は正直に土下座してご退場ください。今ならそれで許してあげますから。ね？

魔法大学院は、世界中から有能な生徒が集まって魔法や技術を学ぶ場所です。結果、教師も世界中から集められたエリートです。大抵の生徒は此处を卒業した後、教師となるべく戻ってきます。しかし中には、国の重要な職につく人もいます。

ちなみに、ここでは留年は出来ません。進級試験に落ちると即刻退学になってしまうのです。おかげで卒業生がいない年もあるくらいです。

卒業すること自体が狭き門な此処に入学した私のスクールライフを描くのが、この物語・・・と言いたいのですが、ちよつと違うようなんですよ。

この大学院でもう20年も教えているエヴァンレヒト先生が主人公設定らしいんです。

本名『イリアル・ヴュ・エヴァンレヒト』。三年前に教授になりました。たぶん人間ではないけど、何族かは誰も知らないようです。（人間じゃなくてもここに入れるんです）ちよつとはなた薄緑色の腰までの長髪と群青の瞳が特徴の人です。見た目はだいたい、人間で言う所の二十代前半くらいです。教え方が上手いと評判だそうです。女の人が無言で黙ってないと言うほど綺麗ですが、大学院は変わった人が多いのでそういうことに頓着しません。

先生をそんな目で見ているのは、私くらいのもんです。

このほかの登場人物についてはまたの機会に。
それでは。

「スクールライフはプライスレス」(後書き)

はじめまして。石楠花三和土です。ノリが悪いうえに、妄想だけで一日過ごせる人間なんで設定細かいです。すみません。
ちなみになんですが、タイトルの読み方は「プライスレススクールライフ」です。

これから頑張っていくのでどうかよろしく。

まともな奴ほど苦勞する

魔法大学院では今日もたくさんの生徒が勉学に励んでいる。

この学校は四年制で教室が選択科目によって細かく区分されている。その中の一学年の魔法研究科の教室でいつものように爆発音が響き渡った。

「お前たちバカだろ。なあ、ほんとにこの成績で入学してきたのか？不正したのなら正直に言え。今なら半殺しで退学にしてやるから」顔を引きつらせてエヴァンレヒト先生は言った。

今日室内は見るも無残な姿と化していた。机やら椅子やらは黒く焦げ破損し、強化ガラスの窓にもひびが入っている。

「なんで魔法陣の上でカップうどんなんか食ってんだーっ！
！！」

正座されられている生徒六人に向かって叫んだ。

一応紹介しておこう。右から順に、アリス、クラニス、セレン、ナルジャ、クルル、イオットである。

「だって」

「なあ」

「お腹すいたから」

「仕方ない」

「・・・・・・」

「でしょう？」

エヴァンレヒト先生は、疲れたように目に手をやって一呼吸つけると言った。

「後始末と反省文レポート用紙15枚だ」

エヴァンレヒト先生が受け持つ魔法研究科は募集人員が少なく、一学年に付き六人しか募集していない。高度な呪文の研究や、魔力実験などを行っているので選ばれたものしか入れない場所なのだ。が、頭のいい人ほど変人だとはよく言ったもので、変わり者が多く集まる所としても知られている。

それでも一応人としてのルールだけは分かっているようなので、そう問題視されたことは今までなかった。しかし、今期入った新入生は例年通りとはいかないようだ。

一人目、アリシェーラ・フラメント。金髪と青い瞳が特徴の16歳の少女。種族は人間。得意魔法は元素系魔法全般。

二人目、クラニス・エンフュ。茶髪に茶の瞳、童顔だがこれでも20歳の青年。種族は人間。得意魔法は、召喚術。

三人目、セレンティー・シスコート。肩口で切りそろえられたまっすぐな黒髪と黒眼が特徴。18歳の少女。妖精族と人間のハーフ。得意魔法は催眠術。

四人目、ナルジャ・バシルーラ。長めの黒髪に金眼と浅黒い肌を持つ、獣人族の青年。18歳。得意魔法は、変身術。

五人目、エリ・トリオ・クルルオ。角刈りにした黒髪とつりあがった赤い眼が特徴の17歳の青年。種族不明。得意魔法は、身体強化術。

六人目、イオット・オデニセア。真っ白な髪で紫の眼を持ち、青白い肌をした16歳の少女。ハーフエルフ。得意魔法は精霊魔法。

この六人は入学試験でも上位中の上位で優秀だった。普段の素行に目をつぶればの話だが。

入学してまだ半年も経っていないというのに学内では、『悪魔の教室』という名で知れ渡っていた。目下の所、被害者は担任講師とそ

の他数名に止まっているため大学院側はそう重い罰を下そうとはしていないかった。

「学長、あいつらの担任辞めさせてください。私の神経過敏になりすぎてゲシュタルト崩壊起こしそうです」

学長室でエヴァンレヒト先生は涙ながらに訴えた。心労のためかいつもより髪がぼさぼさだ。

「まま、落ち着いて落ち着いて。今からじゃ他のところに移せないんだし、あのコたち他の講師に任せたら死人が出ちゃうでしょ。あなただからいくら爆発が起ころうとも、術式に失敗しても、悪魔召喚してもなんとかなって来たんじゃない」

「これ以上は私が死にます。過労で」

「それほど柔じゃないでしょ。大丈夫大丈夫」

学長に訴えてもなんやかんやで押し付けられて終わる。それがいつものことだった。

「なあ、さすがに今回はやばかったんじゃないね」

クラニスは隣で同じように反省文を書いているクラスメイトに言った。

「いつもはさ、うつかりとかそういうのが多かったけど今回は違うよね。なんか故意にやっみたいに思われてるよね」

「これも作戦のうちなのよ」

反省文を書く手を止め、アリスは得意そうに言った。他の四人は黙々と反省文を書いている中、クラニスは不思議そうな顔をした。ふふんと笑ってアリスは続ける。

「こうやって嫌な感じの印象をつけて覚えてもらうことから始まるの。で、いいことしたり、慰めてあげれば先生といい感じになれるって寸法なの。ジャ。アン映画版の法則って言うやつよ」

「いや、ジャ。アンって何？つか、先生といい感じになりたかったの？初耳なんだよね・・・」

クラニスはあきれた顔にちよつとの驚きを加えて言った。しかし、そんなクラニスにこそ皆は驚いていたようだった。イオットが莫迦にするように言った。

「気づかないあんたってどんだけ鈍感なの？先生といい勝負じゃない」

「いや、あの先生気づいてるぞ。気づいてるから避けてんじゃん」ナルジャが口を挿んだ。その隣のクルルもこくこく頷いている。挟まれているセレンだけは我関せずとばかりに黙々と反省文に取り掛かっている。

「ええっ！ナルジャどういうこと？詳しく聞かせて！」

イオットはナルジャに掴みかかる。と、そのときだった。教室の扉が音を立て、渦中のその人が入ってきた。

「終わったか？」

「はい、終わりました」

セレンはそう言ってレポート用紙を出して出て行った。クルルとナルジャも出して出て行った。

「フラメントとエンフュとオデニセアは明日までに書いて提出なさ、解散」

三人にそう言つとエヴァンレヒト先生はさっさと出て行ってしまった。

「恋の道はつらいな。でも絶対に落としてみせる」

「そうそうその意気！」

女子2人が意気投合していた。その隣の男子は深い溜め息をついた。「おれ以外ともな奴っていないのかね」

今日も此処は平和に満ちていた。

まともな奴ほど苦労する（後書き）

第二話です。とりあえず、さっさと出したい奴が出せてないのがネツクな話の上に、あらずじがあまり関係ないです。スマソorz。
この次くらいに過去回想っぽくやるつもりです。

堅物な先生ほど裏の顔を持っている

先生って、意外と・・・可愛いところあるよね。

エヴァンレヒト先生の研究室は、見たこともない装置や本がたくさんあって皆入りたがる。しかし、教授と呼ばれるような人の研究室は大抵危ない。生徒が勝手に入れないように、鍵と封印が施してある。

（ま、でもドアに札挿んでおくと入れるんだなこれが）

アリスはちよくちよくその方法で研究室に出入りしていた。エヴァンレヒト先生は研究室のドアに小さい紙をはさんでいようと気づかない。中の装置は生徒じゃ壊すことも動かすことも不可能だと知っているゆえのことだろう。資料は暗号化された古代語なので専門知識がないと読めないし。

（こっそりお弁当とか置いてこうかな？ラブレターとか添えれば先生も返事返してくれたり・・・）

「そこで何にやけてるんだ？」

「わ！」

後ろから声をかけられ驚いたアリスは振り向いた。

「なんだ、ナイアルか」

「イルじゃなくて悪かったな。アリシエーラ・フラメント」

そこにいたのは、肩につくつかつかないかの長さのざんばらな黒髪と紫の瞳を持つ青年だった。しかも、むき出しの片方の肩からは飛竜のような羽が生えている。そう、彼は人ではなくエヴァンレヒト先生の契約獣なのだ。

「何回目の不法侵入だ。イルに言いつけて停学にしろもうぞ、いい加減。」

初めて会ったときはうやむやになったが、決着つけとくか？」

そつだ。ナイアルと初めて会ったときもここに忍び込んだときだった。

入学式でなんやかんやあつてアリスはエヴァンレヒト先生に一目惚れた。その経過を語るのは難しいので割愛する。
入学して一ヶ月ほど経った頃の話だ。

「先生つてどこに住んでるのかな？毎朝迎えに行ったり、お弁当届けたり、夕食作ったりして仲深めたいのに」
教授のほとんどは大学寮の三階に住んでいるが、エヴァンレヒト先生は違うようでどこに住んでいるかも聞けていないままだった。そこでアリスは考えた。

放課後の先生を追跡しよう、と。
ストーカー

早速行動に移されたが、先生は授業を時間通りに終わらせるとそくさとどこかへ行ってしまう。しかも、転移術を使われると追跡は難しい。

その日も途中で見失つてしまい、当てもなくきよろきよと探し回っていたときのことだ。

「変なところ迷い込んだじゃったなあ」

と、いきなりすぐ近くのドアが開き探し人がすごい勢いで廊下の奥へと走り去っていった。アリスが追いかける暇もなかった。先生が出てきたドアが開いたままなので、アリスは好奇心を出して忍び込んでみた。

入って気が付いた。ここは、エヴァンレヒト先生の研究室だ。
（わあ、すごい。見たこともない術式とか装置でいっぱいだ）
興味津々といった風にアリスは物色し始めた。さすがはソフィスタレスの生徒である。

「そこで何をしている」

いきなり声をかけられ集中していたアリスはぎょつと振り向いた。黒っぽい服を着た男が、声をかけてきた。ココの生徒ではないようだ。警備員か、もしくは講師の誰かかもしれない。

「あの、違うんです。ドアが開いてたのでちよつと覗いてただけで……」

「だったら、ドア閉めてさっさと帰れ。子供が見ても何のうまみもない部屋だぞ」

そのとき部屋のぼんやりとした明かりで姿が見えた。黒い髪から角が生え、背中から皮膜状の羽が生えていた。

「悪魔！？何でこんなところにいるの?!」

応戦しなければ。悪魔はすべての生物にとって最大の敵である。

「おい、俺は……」

『フレイムグレイヴ』

アリスは既に魔法を放っていた。炎柱が男を襲う。

「覚悟しなさい！悪魔はとつとここから去れ！」

「ちっ」

『フリーズチエイン』

男も氷の鎖で応戦する。かなりできるようだ。

だけど、エヴァンレヒト先生が戻ってくるまで持ちこたえれば勝てる。この学校の教授だ。悪魔の一匹や二匹なんてちよちよいと追い払えるくらいの実力はあるはずだ。

「これでどうよ！『ウィンディブラスト』」

空気圧が急上昇していく。厚い空気の弾丸だ、当たればかなりの威力だ。

（これでなんとか……）

「おい！やめろ！」

「なに？悪魔も怖気づくのね！でも、そう言われてやめたりなんかしないわ！」

「莫迦野郎！」

ついにその空気の弾丸が放たれた。しかしそれは男に当たらず、黒い闇の渦に消えた。その後、黒い渦も掻き消えた。

「闇魔法！」

「これは違う。魔法じゃない。それに俺は悪魔なんかじゃない」

「え、じゃああんた一体・・・」

「ナーーーークーんンン！！！！！！！！」

バッターン！

勢いよく扉が開いてエヴァンレヒト先生が駆け込んできた。かと思うと、その勢いのまま男に抱きついた。

「ナーくん、大丈夫？怪我してない？大きな魔法の気配あったからもう心配で心配で…。教授会終わって飛んできたんだよ」

「イル、痛い。離れてくれ」

「ああっ、ごめん、ごめんね」

こんなエヴァンレヒト先生見たことない。そりゃ、初めて会ってから半年も経ってないけど。それでも先生がこんな風な顔して心底心配してるなんて。羨ましい。

「って言うか、あんた先生の何なのよ！？イル、なんて親しげに呼んじゃってさ！」

エヴァンレヒト先生はその大声で初めてそこにアリスがいたことに気が付いたようだった。

「俺はイルの契約獣だ」

契約獣？？？とアリスが頭を悩ませていると。

「フラメント、お前ストーカーするだけじゃ飽き足らず、研究室に忍び込んだ上にナーくんに攻撃魔法使ったな…。ストーカーや研究室に忍び込むのはまだいいが、」

「ナーくんを傷つけようとしたことだけは許せない！！」

激昂するエヴァンレヒト先生を宥めたのはナーくん(?)だった。

「おい、イル。俺は大丈夫だからそう怒るな、な?」

「でも、でもナーくんは私にとって大切な家族みたいなものだし」

「だからって殺したりするのはダメだろ。ちゃんと校長に話して停学にしたらうとかでいいんじゃないのか?」

「むう」

そうやって宥められてむくれている先生はなんかすごく、可愛かった。子供っぽい所あるんだなあ。蚊帳の外つてのは嫌だけど、こんな先生を見れたんだからわりかし得かもしれない。

「あの、でなんでそいつ研究室にいるんですか?」

「そいつなんて呼ぶな!」

「ここに住んでるからに決まってるだろ。あと、俺のことはナイアルでいい」

「住んでるって先生と?」

「もちろんだ! ナーくんとは私は三百年以上一緒にいるんだからな!」
えっへんとでも言いそうな調子で先生は言った。やっぱり子供っぽい。頭なでなでしてあげたくなる。

「じゃ、校長室行こうか」

「うっ」

アリスはそのまま校長室へと連行され、判決を言い渡された。

「あの時は確か、一週間の停学と花壇整備だったか、意外に軽かったな」

「軽くない」

あのときのことと懲りたのでアリスは、ナイアルには手を出さないことに決めた。

(こいつに何もなければ先生割と寛容だし、将を射んと欲さばまず馬より、ね。でも懐柔は止めといたほうがいいわね。先生に嫌われたら元も子もない)

こうして、アリスはまた計略を練る。すべては、先生の恋人になるためのプロセスに過ぎない。
結果があればそれでよし！

（先生は意外と子どもっぽいことが分かっただけでもいい収穫ね！）

堅物な先生ほど裏の顔を持っている（後書き）

ずいぶん間空いてしまいましたが、次話投稿です。

書いてて思ったけど、先生出番少ないな、主人公なのに。

恋愛要素あるくせにラブコメチックに書けない。ちよっただけ伏線散布中。回収できるかは判らない。

最後に、読みづらい文でスマソorz

笑えない状況ほど笑ってしまうのが人

何でこんな事になったのかな。ね．．。

クラニスには重苦しい溜め息をついた。

「ねえ、あんた召喚術得意だったわよね」

そんなときふと、アリスに尋ねられてクラニスは返事した。

「たしかに召喚術は得意だよ。でもそれがどうかしたかね？」

「契約獣って知ってる？」

ちよっとドキツとしてしまった。でも、彼女が知っているはずがない。そう思っただけで普通に噛み砕いた説明をした。

「知ってるよ。契約獣っていうのは召喚術みたいに強制的に相手を使役するんじゃない、相手の力を借りる代わりに代償を払うものなんだよね。代償を払うデメリットはあるけど、その分相手は契約者の言うことを聞いてくれる。それともうひとつメリットがあって、たいした魔力がなくても強力な魔物とかを使役できるんだ。代償が大きければ、大きいほどね。ほら、悪魔とかがそのいい例なんだよね」

アリスは話を聞いて少し考えた後、ポツリと訊ねた。

「……代償って、例えば何なの？」

「うーん。契約した魔物の種類にもよるけど、多くは食べ物だね。

生贄とか、魂とか食べる奴はそれよこせって迫るんだ。ま、契約獣のほとんどが悪魔だからね。他は、詳しくは知らないんだよね」

「そう……」

珍しく気落ちしてる。こんなに元気がないアリスは初めて見た。また、先生がらみのことで悩んでるのかな。

「どうしたんだアリス。ついに、悪魔と契約して先生を自分のものにしようとか考えてるんじゃないだろうね？」

心配になったので聞いてみた。まさかね。

「違うわよ。ただ、先生が契約獣持つてるそうだから気になっただけよ」

「へえ、ってちょっと待つて。先生契約獣持つてんの？」

「ええ。悪魔じゃないって言うてたけど、もしかしたら危険な奴かもって思って。」

ねえ、先生何を代償にしたと思う？」

先生ほどの使い手が何で契約獣を必要としたんだろうか。

「その契約獣が何かにもよるけど、先生のことだからあんまり危険じゃないと思うよ、僕はね。先生は悪魔に取り付かれるようなやわな人間じゃない。ドラゴン族って噂もあるしね」

最強と謳われるドラゴン族、下手な悪魔なんかには絶対に負けたりしないだろう。

「ありがと、ちょっと安心した。先生にもつかい聞いてみるね。じゃ」

アリスはそう言うて去っていった。常々思っけどね、おれね、君より四歳も年上なんだよ。まるで、年下みたいに頭に手置くの止めてくれないかな。哀しくなってくるんだよね。

契約獣を先生が持つている、か。やっぱり相談してみようかね、自分に関係ないなら規則には厳しくない人だし。

コンコン。

「失礼します。エヴァンレヒト教授に相談があつて参りました」

「どうぞ」

研究室に入るのは初めてだが、いつもどおりにして入った。

中は想像していたよりも複雑な機器が多く、何の研究をしているのかすら分らない。そんな部屋の奥のデスクに座つて事務仕事をしている先生はいつもより眠そうだった。

「ちよつと待つてろ、もうちょいで区切りつくから」

顔も上げずに言われ、おれは資料に埋もれたソファを掘り起こして

腰掛けた。壁一面の本棚が窓すら塞いでいる。それをぼんやり眺めていると、

「よし。で、相談って一体なんだ？」

エヴァンレヒト先生が椅子を引つ張ってきて、すぐ近くに腰掛けた。能天気そうなお前が珍しいな。って何気にひどいなこの人。

「実は、学生寮のルームメイトが悪魔を召喚しようとしてるみたいなんですよ」

俺はいきさつを話し始めた。

「最初は気のせいだと思ったんですが、おれの研究資料が誰かに読まれてる形跡があつたんです。まあ、暗号化してあるからといって部屋のデスクの上に上げっ放しにしていた俺も悪いわけですがね。で、読まれてる資料つてのがおれも召喚術のロイローサ教授に頼み込んでようやく貸してもらえたもので、『契約と代償』って奴だったんです」

『契約と代償』とは、召喚術の原理を用いて行う契約獣召喚の儀式について詳細に記された本である。この儀式は、普通の悪魔よりも高位のそれこそ魔神すらも呼び出すことができるので、禁書とされていた。

「おまえ、何研究するつもりだったんだ？つか、禁書ほっぽり出していくなよ！」

「だから悪かったって言うてるじゃないですか。で、話し続けますけどね。」

気になつて影に潜む妖霊を潜ませておいて様子を見たんです。そして、ルームメイトのギャレイドって奴が熱心に読んでてしかもそのページには、『アフォーム・ザー』の召喚に必要なことが書かれてたんです」

「『アフォーム・ザー』だと！旧支配者クトウグアの眷属じゃないか。それも、封印されてる奴だぞ」

エヴァンレヒト先生は腰を浮かせた。

「そうなんですが、儀式の条件が整えば封印されていても召喚が可

能だと書かれていました。ギャレイドは最近、召喚獣を戦わせて勝つというゲームにのめり込んでみたいでね。しかも負けが続いていたようです」

ふむ、とエヴァンレヒト先生は口に手を当てて考える格好をした。

「じゃあ、その勝負に勝つためにそんな化物を呼び出そうとしているというわけか。で、証拠は？」

「今朝返しに行こうとしていたその本をギャレイドに盗まりました。本にはまだシャドウポットを付けてありますが繋がりが希薄になっています」

「で、向かう前に私に助力を求めてきたと、いうことでいいのか？」

「はい」

アフォーム「ザー」みたいな化物がもし呼び出されでもしたらおれの手には確実に負えない。幸いにして、儀式を行なうべき時刻までまだ猶予はある。先生は面倒事は御免だということかもしれないが、先生以外じゃ頼れそうな人はいない。

「本当は一人で止めたかったのか？」

ことが済んでもお前も厳罰ものだぞ。そんなことは分かっている。でも、

「途中で諦めてくれるならそのほうがいいでしょ。ルームメイトを誰が好き好んで追い出したいと思うますか、ね？」

肩をすくめてそう言っておいた。

「ふ、やっぱりお前はクラスの中ではまともだな」

おまえにいなくなれたらわたしの苦労は倍増するな。そういつて苦笑した先生は、男のおれが見ても確かに綺麗だった。これじゃ、アリスも惚れるね。

「じゃあ、行こうか」

入学して半年足らずでこんなことをすることになるとは思ってたな。でもま、それも悪くはないだろう。

「鯨の口」が地平線と重なるまであと二時間ぐらいか。ギャレイドを止めるには十分な時間だろ。

おれは、本の影に潜ませたシャドウポットとの繋がりを慎重に探る。召喚術というのは本当に微妙なこの感覚を掴むところから始まる。

自分の神経を伸ばしていくような錯覚。伸ばす先を探すな、ただ伸ばせ、そうすればたどり着く。その教えは何度も反復した。

「つかんだ」

はつきりと分かる。奴が今いる場所が。

「西の四号棟の展望台だね」

おれたちは教師専用の転移通路で一気にそこまで移動した。ギャレイドは絶対止めなければならぬんだ。召喚される前にケリをつける。

今日の夕日は炎のように紅かった。

笑えない状況ほど笑ってしまうのが人（後書き）

注釈1：『アフォームIIザー』とはクトウルフ神話に出てくる架空の神性。燐光に似た不浄な青白い光を放つ灰色の炎の存在であり、その炎は極地の極寒の冷気を伴うとされるものです。

注釈2：『鯨の口』とはフォーマルハウトのことです。フォーマルハウトは視等級1.16等の恒星です。

ほか詳しいことはwikiでも調べてみてくらはい。

更新亀ですんません。ていうか、ちゃんと読んでくれる人がいるのかすら不明。ちゃんと最後まで読んでくれる人には感謝します。

今後よろしく願います。

予想と現実とは違うもの、想像と妄想は同じもの

「は、いつ！ みつなさん！！ これより第二十一回召喚魔バトル大会を、開催します！！！！！！」

『うおおお！！！！！！！！！』

（なんですか？コレ？）

「先生、そろそろ諦めてくださいね」

「知らん」

ああもう、まったく。

俺はため息をついて、ちよつと前のことを回想した。

俺と先生が西の四号棟の展望台へ辿り着くとそこにいたのはギャレイドだけじゃなかった。なにやら揉めているようだった。

「おい、それ渡せよ。今度は勝たせてやるから、な」

「ダメだって。禁書の化物なんか呼び出したらどんなことになるかわかったもんじゃないでしょ」

禁書を持っている気弱そうな眼鏡がギャレイド・ホルンだ。完璧に名前負けしてるね。交渉している、なんかちゃらそんな茶髪生徒の方は見覚えがないね。いや、見たことはあるかもしれないけど話したことはないね。

「その二人、その本返してくれないかね？」

俺の声にぎょっとしたように二人は振り向いた。そして、俺と先生を目に留めるとその男子生徒 A（仮）は一目散に逃げ出そうとした。だが、遅い。

アイボリーアイビー

先生の捕縛用魔法で二人とも拘束されてしまう。象牙色の鳶に足を取られ男子生徒Aは転んだ。ずいぶんと無様な転び方で俺は思わず吹いてしまったね。

「んじゃ、禁書は回収させてもらうよ。ロイローサ教授にはわたしの方から返しておこう」

鳶に本を取らせ、先生は白衣の中にしまってしまった。あの白衣の中どうなってるの？っていつも気になってはいるが口には出さない。「と、後は君たちの担当教師に連絡を・・・」

「待ってください！」

それまで大人しく鳶に捕まっていたギャレイドが突然叫んだ。なんなんだ？ちよつとビクッてした。

「僕とクオন্ツのことをファイフィー八先生に報告する前に聞いていただきたいことがあるんです！」

あ、クオンツっていうのね。男子生徒A君。って、あれ？ファイフィー八先生って召喚術の先生じゃないよね？魔法行使生物（魔法が使える生き物のこと）の研究してる人じゃなかった？

「なんだ？聞いてやらんこともないから言ってみろ」

ギャレイドは話し始めた。

曰く、

『実は僕たち、“召喚魔バトルクラブ”って言うクラブに所属しててその大会で賭け勝負が行なわれたんです。それで、大負けしてしまつて、次の勝負で勝たないとんでもない借金が・・・。それでつい、クラニス君の机の上に禁書が置いてあったのでこれなら勝てるんじゃないかと思って、すみません。それで、折り入って頼みがあるんです。俺たちの代わりに出場してくれませんか？このままじゃ、学費も払えなくなつて退学してしまうんです。お願いします！』

とのこと。

ま、先生の方は即座に、

「やだね。それに教師がしゃしゃり出るのは反則じゃないのか？」

とことわったけど。こいつもしつこくてね。

「レベル別の対戦になっていますし、先生でも出場している人もいますから大丈夫です」

「あつそ。でもやだ」

「そこをなんとか」

俺もなんか、ちょっとかわいそうだな、とか思っちゃったりしたもんだから。先生をどうにか説得して、その後すぐに行なわれるっていうその大会に代役エントリーしたのだった。

（俺も相当なお人好しだね）

というわけで、冒頭に戻る。

「ではつ本大会のルール説明をさせていただく前に審判紹介をさせていただきます！

審判を勤めていただくのは本大会主催クラブリーダー、ファルコス・エヒデさまと召喚術学准教授エフォーリアルメ・リキサスさまです。皆さん拍手〜！！」

司会担当の放送部の子、めっさはりきってるね。真夜中なのに。明日講義ないのかな？俺はだいぶ眠くなってきた。先生、明日の講義は休んでもいいですかね。

「みなさん、ルールを説明します。魔法具の助けによる召喚は原則禁止されており。見つけた場合には即失格とさせていただきます。召喚自体が禁じられている“悪魔”などの召喚も認めておりません。

なお、相手召喚者に怪我を負わせた場合も失格とみなします。あくまで召喚魔同士のバトルです。

対戦者はペアを組み、予選は集団戦でふるい落とし、トーナメント一回戦はダブルス、二回戦以降は交代制で戦ってもらいます。トーナメント表はホルルの掲示板に表示してあります。

みなさん、ルールを守って優勝目指して頑張ってください!!」

エントリー数はそれほど多いわけではない。一ブロック各五、六組といった所かね・・・。

俺達はDブロックだから、次だね。ま、大丈夫だろうけどね、チーム名のセンスの無さはいかんともしがたい。

「『イニシアチブオブジウイン』って、負けが嵩んでこんな事になった奴等にはあまりにも似合わないだろ。つーかなんだよ、“勝利の先駆け”って。先駆者どころか単なる『負け犬畜生』^{アンダードッグ}じゃねえか、つたく。もつと別な名前あるだろ」

先生の意見に全面的に同意。代役だから変えられないのは仕方ないけどね。と、ふと気になったので先生に聞いてみた。

「じゃ、どんな名前が良かったんですかね？」

先生は少しくなつて、答えた。

「『マグナアグニ』とかとどうだ？古語で“大処刑”って意味だが、つておーい！皆殺しにするつもりだったのか？こんなに過激で怖い先生だったのか？」

なんか表面上落ち着いたように見えたけど全然そうじゃないような先生が真面目に怖くなった。ホントに明日は休もうか・・・。

予想と現実が違うもの、想像と妄想は同じもの（後書き）

ほんとマジギリギリになってしまいました。一月中に投稿できませんでした。来月はまた色々忙しいんですけどもしかしたら投稿は三月になっ
てしまうかもです。一応頑張りますが。更新ほんと亀のごとくでス
ミマセン。評価、感想など待ってます。暇があったらよろしく願
いします。

先生、真面目にやってください

さてと、何を召喚すればいいかね？

「篩い落としてコトは大体が雑魚だろ。めんどいから適当にぱつと殺つていいよな？」

「まじで処刑するつもり！？」

はあ、とエヴァンレヒト先生は溜め息をついて呆れたようにこう言った。

「ばかか。『マグナアグニ』つつうのは本来『偉大なる火の神』って意味で転じて供物を燃やす、つまり火刑の意味になったんだ。こんな所で焚き火してどうすんだよ。このホール燃やす気か？」
(いや、俺があんたに言いたいです)

「Dブロックに出場する選手は準備してください」

「ああ、じゃ、行きましようかね」

ホールの一区画に俺達は立った。道具を使用してはいけないので一々召喚陣を描かなければならないのは面倒だね。白墨で地面に陣を敷いていく。しかし、先生は何もしない。

「真面目に陣描いてくれませんかね」

「ちつ。つたく」

ぶつくさ言いながら先生は何事かぶつぶつと唱え始めた。

こつちも陣を敷き終えたので古代ノーデンシア語で召喚の呪文を唱える。

シエル・ヴェトム・イラ・マンティコーラース・アグリ
「我は呼ぶ汝“人を喰らうもの”を
イザス・メネセ・エル・エルラ・オラ
我が開きし扉より現れよ」

その声に呼応して陣が輝き始めた。

陣の中心から光とともに召喚獣が出現した。それは、赤い体毛に覆われた体とコウモリのような羽を持った3メルテ（1メルテは約1メートル）はありそうな獅子だった。

「マンティコアか。こけおどしには丁度いいな」

凶悪な人食いの化物だしね。でも、こけおどしではないと思うんだけど・・・。

「我と結びし契約のもと　我が呼び声に応え来たれ　災厄を呼ぶ古の妖狐」

先生も何かを呼び出し、って、陣1メルテも無いくらいに小さいんですけど。大丈夫かな？

呼び出すものの強さに応じて召喚陣は大きくなるのが基本だ。やる気無いからって何を呼び出す気なんだろうね。

「コーン」

その小さな陣から狐色の毛玉が転がり出た。ナニコレ？

「フェルドルウ、わたしの契約獣だ。可愛いだろ？」

「いや、可愛いですけどね、強いんですか？こんな体長半メルテの仔狐」

すると先生はふふん、と胸を張って言った。

「これは仮想体だ。封印を解いたらドラゴンだって一瞬で焼く尽くせる。それに、この状態でもお前のマンティコアぐらいなら相手にならないぞ？」

「マジっすか？」

「みなさん！準備はいいですかー！？

では、試合、開始！！！！」

とうとう試合は始まってしまった。だけど、こちらにとって脅威に思える戦力はひとつもないね。さっさと終わらせようかね。マンティコアのマルス（今付けた仮名）に制圧を命じた。

「シンシルドアブン第一封印開錠」

先生も戦闘態勢にしたようだ。

まあ、マルスが人食わないように注意しておけば後は、ノープロブレム。予選なんてそんなモンさね。

先生、真面目にやってください（後書き）

だいぶ遅れました。予定より。

というか、この大会の話も数話で終わらせるつもりでいたのですが、なんかノリで行っちゃいまして。平行して挿絵もつけようかと画策しています。どうせ鉛筆か、ペンの雑絵ですけど。

感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4305i/>

PricelesSchoolLife

2010年10月9日22時36分発行